

いと言及したが、全編に流れる詩情、構成法に視点を移すと、先学の指摘の如く、谷口孝介氏の言を借りれば、<sup>(注5)</sup>「杜甫が創始し、白居易と元稹とが文学形式として定着せしめた二百韻形式の五言排律を倣ったものであり、ことに白居易「東南行一百韻」とそれに和した元稹「酬樂天東南行詩一百韻」とに多くの措辞を抛りながら制作されたことについては、すでに川口久雄氏による詳細な指摘が存在する」のである。

この川口久雄氏の指摘されている元白「東南行一百韻」及び「酬樂天東南行詩一百韻」と道真の「敘意一百韻」との比較考察並びに投影の指摘箇所には筆者は異論をはさむ余地はないし、又新たに付加するものを持ち合わせていない。川口氏を始め先学の指摘通り、この道真の「敘意一百韻」制作の大きな動機・背景としてこの元白の唱和詩があることは明らかである。これは単に、詩句の措辞の投影にとどまるものではなく、作品制作の根源にかかわる深層部分への深い投影とも換言できる。

筆者は、今回稿を起こすにあたり、新たに提起したかったことは、前述の元白の唱和詩とともに考察すべき「代書詩一百韻、寄微之」という、白居易の元稹宛の長律詩の存在である。この詩の道真の「敘意一百韻」への投影関係の指摘は、先の川口久雄氏の著の中で若干触れられているが、詳細にこの詩を吟味すると新たな事象が浮かび上がってくるように思う。

以下、その事を論じてみる。

白居易の「0608 代書詩一百韻、寄微之」は白居易三十九歳の時、元稹が事により江陵（湖北省）の江陵土曹に左遷させられる事件が起きる。長安にいる白居易がその元稹を気遣って送った詩である。これは唱和詩で、元稹の返答詩にも残る。

ここでは原文のみを以下に引用してみる。